

伊藤整先生への手紙 新女性に関する十二章

椎名 利(化工会)

お茶の水の駅から坂を下り駿河台下の交差点に至ると、神田古本祭りの赤地に白抜きの大きな垂れ幕が見えた。靖国通りに面した店は車道側にも書棚を設え、あたかも図書館のオープン書庫を眺めているようだった。

毎年、秋の読書週間に合わせて催されるこのお祭りは、平日なのにすでに購入した本を抱える人、かなり膨らんだバックバックを背負った人など大勢で賑わっていた。

私が古本に興味を持っているのは、新刊本屋とは全く違った文壇地図を見ることができるからだった。

新刊本屋で四、五〇年前の作家で多くの作品が並ぶのはせいぜい三島由紀夫と夏目漱石ぐらいのものだろうか。その他書棚に並んでいる作家は、せいぜい一〇数年前までといったところではなかろうか。それでもすでに消えている作家も多い。

しかし、古本屋に行くと全く違う風景が見られる。尾崎翠などといった古顔もあるかと思えば、野間宏、梅崎春生といった戦後派の作家から、中村真一郎、阿部公房、安岡章太郎、辻邦夫といったリアルタイムに読んだ作家を目にすることができる。

私は神田の古本祭りに来たのは久しぶりだった。皆と同じように道路にはみ出た陳列台まで丹念に見ていた。特に目的があったわけではないが、偶然文庫本になった『女性に関する十二章』(伊藤整)——初版本は新書版でした——を見つけた。表紙は新書版と同じフライパンなど台所用品が描かれた花森安治のデザインになるものだった。

伊藤整先生への手紙

伊藤整先生(1905～1969)、先生が亡くなられてすでに四二年になります。

私は、大学に入学したとき——一九五四年——先生の英語の授業を受けたものです。テキストはジョイスの『ユリシーズ』でした。今、日本語で読んでも難解な小説で、英文解釈としての解説はよく覚えていないのですが、読みながら合間に交える文学談義はよく覚えています。

例えば『オディッセイ』のなかに『タコのような魔物が住んでいる海峡を抜けるとき、六人の船員が食われてしまうが、そこを漕ぎぬけて次の島に上がり休息し食事をとり、満腹になった仲間たちは、魔物に食われてしまった仲間を思い出して泣いた』と書かれている。

が、近代作家がこれを書いたら、『彼らは船をこぎながらも魔物にとって食われた仲間を思い出して絶えず涙をぬぐった』とか『島に上がった仲間たちは食事の支度をするのも忘れて……』と書くだらうとハックスレー(英国の作家)は述べている。

仲間が食い殺された水夫たちが、その直後には嘆きもせず満腹して安心感を得て初めて泣いた。この事実は冷酷に人間の心理をつかんでいる。

個人の署名のある作品では、あまりにも非道徳的なことは書きえない。そこに近代リアリズムの限界もあり、近代文学の弱点が見られる。

あの『異邦人』で不条理を書いたカミュでさえ、『ペスト』では災害に対し協力し合う人間像を書いている。

当時先生は、『チャタレー夫人の恋人』を猥褻文学とする裁判で、福原麟太郎初め著名な文学者がその芸術性を認め、擁護するといった文壇の寵児になっていたのです。

一九五三年に中央公論から出されたユーモアのある洒落な文章で書かれた『女性に関する十二章』は、当時の女性に受け爆発的な人気で、先生は所謂ベストセラー作家になったのです。

‘50年代、青春を送った私は、先生の女性論を読み返しながら、当時の男女関係の風潮を思い出し懐かしむとともに、現代と重ね合わせていたのです。

新女性に関する十二章

第一章 結婚と幸福

◆ 伊藤先生

全国婦人未婚者組合——先生の創作と思われるが——が設立されたとのA新聞の見出しに驚いて記事を読むと、会員資格は三五歳以上の未婚の女性でこのような女性のために家庭に代わるクラブの設立を要求し、財源として既婚者に結婚税をかけると云うものでした。

このような要求が通らない時は、既婚女性の所有する男性と積極的に恋愛し盗めということで、既婚女性がふりまわす性道徳は、徹底的に粉碎し、それを奪い取ることは生きる権利である。すなわち男性は、女性に愛と経済的満足を与える物体であると書かれていました。

このような認識は当然『結婚は幸福』であり、『三五歳以上の女性は既婚の男性を奪う可能性があるほど魅力的である』ことが前提になっています。

私自身は、『結婚は幸福』なものだと思っていますが、『幸福にあらず』と思っておられる方もおります。

その代表的な例は、夏目漱石君であり彼は『近代人は『エゴ』が強く己をむなしくして女性を愛することなど出来ない』と、結婚に疑問符を付けています。また永井荷風君は、若い時名舞踊家藤蔭静江女子と結婚しますが、合意の上離婚し各々の道を歩き彼は生涯独身を貫いていたのです。

このような著名な知識人が独身を貫いているのにもかかわらず三五歳の未婚の女性が独身を不幸だと思いい結婚を幸福なものだと思ふのはなぜでしょうか？

それは、まだ自分の味わったことのない果実は美味しいものだと考えるのに似て、一度も結婚してないことが結婚は幸福にするものだと考えているのでしょう。

この結婚願望病は、男女ともにあるもので、これがあるために人類は滅亡せずに済んでいるわけです。このような一般的な考えを全く否定するのも考えものですが、結婚しないと落ち着かないと考える人にとって『性道徳は、既婚女性の既得権を擁護するもの』だと絶叫したくなるのも当然でしょう。しかし、既婚の男性を誘惑しようとの行為は逆に遊ばれてしまう危険性のほうが高く、結婚にまで結び付けるのは至難の業ではないでしょうか。

また、既婚男性をアタックするのは、『俺こんなにもてるんだ』と、いたずらに男性を喜ばせることになり日本は女護ガ島となり男性天国になるでしょう。

元々適当な配偶者が得難いのは、戦争で若者が多く失われたのが原因で、戦争により若者が失われれば男性天国になると政治家が理解し始めると、戦争を始めるかもしれません。

そしてそのとき、未婚組合は反省するでしょう。寧ろ、そのような運動をすることなく男性を増やす政策をと

り、その中から自分に適した者を選び、たがいに浮気もせず性道徳を守るほうが幸せになると思えるでしょう。

◆ 私

『女性に関する十二章』は、一九五二年一月から一二月まで『婦人公論』に掲載され、一九五三年二月二五日中央公論社から新書版として出版され、三か月で二〇万部を突破しベストセラーになったものです。当時未婚組合があったかどうかはわかりませんが、人口調査の資料を見ると、先生の言われる戦争による後遺症、適齢期の男性が少ないことがうなずけます。

人口統計によると、女性一〇〇人に対する適齢期の男性の割合は、平時は 103～106 人と男性が多いのですが、一九五〇年のデータを見てみますと、この割合は、20～24 歳 98.6 人 25～29 歳 83.9 人 30～34 歳 83.9 人 35～39 歳 88.9 人で明らかに男性が失われているのが伺えます。

戦後一九四七年に結婚ブームがあり、その結果『団塊世代』が生まれ、人口は順調に伸び、六〇年代には結婚適齢期の男女比は、103～105 人と正常のレベルに達しています。

私が終戦を迎えたのは小学校六年の時に結婚事情などは知りませんでしたが、戦時中結婚適齢期であった茨木のり子さん(1926～2006)は次のような詩を書いています。

わたしが一番きれいだったとき

街々はがらがらくずれていて

とんでもないところから

青空なんかが見えたりした

私が一番きれいだったとき

まわりの人達が沢山死んだ

工場で 海で 名もない島で

わたしはおしゃれのきっかけを落としてしまった

わたしが一番きれいだったとき

だれもやさしく贈り物をささげてくれなかった

男たちは拳手の礼しか知らなくて

きれいな眼差しだけを残し皆発っていった

わたしが一番きれいだったとき

わたしの国は戦争に負けた

そんな馬鹿なことはあるものか

ブラウスの腕をまくり卑屈な町をのし歩いた

.....

わたしが一番きれいだったとき

わたしはとてもふしあわせ

わたしはとてもとんちんかん

わたしはめっぼうさびしかった

だから決めた できれば長生きすることに

年をとってから凄く美しい絵を描いた

フランスのルオー爺さんのように

ね

第二章 女性の姿形

◆ 伊藤先生

女性は、自分の姿形が男性にどのような影響を与えているか知らずに、『ヴォーグ』などの婦人雑誌により服装の流行を追い化粧し、はたまたベストセラーなどの本を読み知的な女性を演ずるのですが、自分の男性に与える印象を少しも理解することなく日々を送ります。そしてそのような努力が無駄だと知った時、これらのことは自ら働くことなく男性に隷属することだと悟り、神近市子先生（衆議院議員 フェミニスト）の言われるように、自分が仕事を持ち独立した生活を持つことだと悟り、独立して仕事をしている比較的若い平林たい子、石垣綾子先生（社会評論家）と言った方々の写真などを取出し髪型や服装をまね、同時に文学入門、社会学などを読み私は内面も外面も充実していると自分に言い聞かせ心の安定を維持しようと努力するわけですが、彼女たちの髪型や服装が彼女たちの肉体的特徴を現しているものだと考えずに真似る、追従者になるのは考えものです。

このような画一的、権威追従型化粧法は男性にあまり大きな影響を与えません。

しかし、中に確信に満ち「あたしを美しいと言ってくれる男性は一杯いますわ」と、言う自信に満ちた女性もいるでしょう。

このような方々に私はこう申し上げたい。

「男性はシャイで、ほんとに心ひかれた女性に、その時そのことを言えないものです。多分その言葉を出した相手は昔の恋人に似ているところがあったのだと思います。人間の感性は少年期、少女期に異性から受けた感動が積み重ねられたものなのです」

このような若い時に起こる恋愛感情の苦しさから逃れようとし、四〇才ぐらいになればと思ったのですが、作家と言う商売柄でしょうか、ますます感性に磨きがかかり一向に衰える様子はありません。さらに面倒なことには、女性の魅力の意味が変化してくるのです。

例えば、ふくよかな腰部の魅力的な女性を見た場合、やがてこの腰でデンと座られ梃子でも動かない事態が来るのではないかと考えたり、素敵に服装をしている女性には、将来高価な服を求められ私はますます働かなければならなくなるのではないかと。また賢い女性だと将来『カカア天下』になるのではないかと考えると怖気つくのです。

では、あまり利口でもなく美しくもない女性を選べば旦那は踏みつけられることなく具合がいいのではない

かと考えます。

しかし、そのような考え方は、人生から美というものの光を消す功利主義的思想ではないでしょうか。

◆ 私

人間も自然の『生殖システム、恋、性欲、愛着』から自由であるわけではありません。

つまり、恋することで一人の相手を選び、性欲が生殖を具体的にし、相手に対する穏やかな愛情が愛着となり子育てなどを行うわけです。

ではどうやって一人を選ぶのでしょうか？

スイス・ベルン大クラウス・ウェデキンド博士の実験によると、女性は相手の『免疫システム』を匂いでかき分けているそうです。簡単に言うとあらかじめ免疫型——白血球の血液型:HLA 型——を調べた男性のTシャツの匂いをかがせ、好みの匂いを選んでもらうと『いい匂い』と感じるのは、自分と免疫型が異なる男性のもので、免疫型が同じ男性の匂いは『嫌いな匂い』と感じるということです。これは生物学的にも HLA に多様性をもたらす納得度の高いものです。

一方モネ研究所(フィラデルフィア)のレイチェル・ハーツ博士によると、男女が恋人を選ぶ基準が女子は『匂い』男性は『視覚』だということです。

では、男性は『ルックス』といっても女性のどこを見ているのでしょうか？博士によると『腰のくびれ』だということです。つまり脂肪や筋肉の付き方は男女差がとりわけ大きいものですが、中でも『腰のくびれ』はその差が最も大きいところ。その差をもたらしているのは女性ホルモンのエストロゲンです。男性のウエストとヒップの比は 8.5:9.5~10 ぐらいですが健康な女性は 6.7:8~10 といわれています。『腰のくびれ』は、また妊娠のしやすさにも関係し、『くびれ』の少ない女性ほど妊娠しにくいというデータもあります。

また、もっとも好みの多かった比率は 7:10 でした。

男性の選ぶ基準がこのように解明されてくると、女性が流行に敏感になり、お洒落に身をやつすのは生物学的にも好ましい方向であり、また先生が言われるように人生に美を添えてくれるものではないでしょうか。

このような美に満ちた社会を実現するためには、女性のお洒落を必要とします。そのためには『花伝書』に『習・破・離』とあるように、はじめは婦人雑誌などから流行を真似ることに憂き身をやつすべきです。そのような行為の中から个性的なお洒落が生まれるのです。真似こそ自分にあったお洒落を見出すための入り口です。また男性はこのような女性の欲望を経済的に援助せねばなりません。これも男の甲斐性の一つではないでしょうか。

大場みな子さんは、『女は、たとえどんなはずんだ長い歴史を経ているとしても、男に対して永遠の讃歌を捧げる性質をもつということにおいてのみ女でありうる。(中略) 女の魅力は、独りの力で出来あがっていることはまずない。男たちが「きれいだ」と言うので女たちはきれいになるだけだ』(霧の旅)

第三章 哀れなる男性

◆ 伊藤先生

戦後の憲法は、男女同権を保証し妻も男が不貞し結婚生活に愛や相互理解が失われた時、離婚するのは自由です。結婚生活の中では互いに相手に専属するという性の独占契約があります。なぜ専属かは重大な問題で、愛があるところには貞操があるといわれています。現在の法と表向きの社会通念ではそれは男女ともに等しく要求されています。ですが、日本でもヨーロッパでも裏面では、かなり公然と男性の性を自由に満たす施設は存在していますが、女性向けの施設は皆無と言ってよいでしょう。

それは、男性の性の働きは強烈で撒布的で、出来るだけ多くの女性に働きかけるように作られているからです。もし男性の性に積極性が失われ女性のように受動的、受容的になると、人類は滅亡の危険性に直面するかもしれません。

もし、「自分の妻にしか性を感じない」と言う男性がいるとすれば、私は偽善者と呼ぶでしょう。このように生物学的に撒布的、攻撃的な『スケベ』に作られている男性が貞操を守るということは、ほとんど自己を殺す努力の結果だということです。この苦しみを女性は理解することができません。もし、ある女性が、夫や恋人が貞操を守っていることを理解できたら、強い感謝と理解を示すべきです。

◆ 私

最近『草食系男性』と呼ばれる、恋愛に積極的でないわけではないが、積極的になれない男性が多くなっています。彼達がガツガツと異性を求めないのは、互いに傷ついたり傷つけたりすることを怖れているからです。

この男性の特徴は、『人の話を聞くのが苦にならない』、『家庭を大事にする』、『自分から女性を口説いたことがない』、『女の友達が多く、よく一緒に遊んでいる』、『女と一緒に寝ても何もしないことがある』などで、このような特徴を掲げたうえ三〇代未婚男女を対象にアンケートを実施した結果は、『どちらかといえば草食系』61%、『完全に草食系』13%と『自分は草食系』と思う男性は 75%にのぼっています。

先生が取り上げておられる男性はこの分類からすると『肉食系男性』と呼ばれるものですが、このような『草食系男性』の増加は、オスとしての本能が退化を示しているのでしょうか？

先生の作品『変容』は、老年に達した画家の瀧田が、若いころからの、女性遍歴をこう語ります。

私(瀧田)は、歌子(絵のモデル嬢)に満足できず、東京に出てからもバーのホステスなどと情交を重ねるが、女性評論家の千子との出会いを、なぜか鮮明に思い出すことができる。抑制衝動の強い彼女は、他の女性よりもっと余韻と余情があり、その誘いは強く、その情感は深かった。その理由は多分、生きることの意味をさぐり味わっている人間は、その性においてもその反響を全人間的に受け取っている。生きる意味の把握があるところだけ性の感動の把握もあるのではないか。「人生の経験が深いほど性の快樂も深い」と語っています。

また、性はそれ自体が善と悪のけじめをなす一線だとは感じないが男と女が、同じ方向に傾いた心を持つとき二人は性をきっかけに結びつくのだ。

この主人公瀧田には、先生が投影されていると思われませんが、彼は紛れもなく『肉食系男子』です。さらに先生は、知的水準が高いほど性の味わいも深いと述べています。

一方、アメリカの性教育協会の標語に『性は両股の間ではなく、両耳の間にある』とあります。これは、セックスで快感を得るためには高度な脳が要求されるのを意味しているのです。

詩人で評論家、小説家、大学教授である伊藤先生はこの判断基準によると、最強の『肉食男子』ではなかったのでしょうか。

第四章 妻は世間の代表者

◆ 伊藤先生

女性は愛するより愛に報いる傾向を強く持っているものです。ですから『ロミオとジュリエット』のロミオや『春琴抄』の佐助のような女性礼拝者を夢見、男性もまたそれを誘導するかの心情をみせることで女性との結婚を果たしますが、一般的には三か月または三年で結婚以前のような愛のささやきも消え、生涯の失敗をしたかの表情をするものです。

これは心理学的には『女性を確保したので、男性が求愛期間の擬似的な女性崇拝から脱して自主性を取り戻した』によるものです。事実、結婚の口実に使われている愛と思われているものは、情緒のようです。

女性は普通情緒抜きの生活はしないものです。そのためこのような男性の変化に失望し、明治以来広まった『人は愛によって結婚すべきだ』との近代的結婚観から人妻は絶望感に襲われながら生活するのです。フローベルの『ボヴァリイ夫人』はこの夢想的な情緒を見事に描いて見せています。

また、知的階級の男性は、社会を常に批判的に見ているため、俗悪な社会の現実に屈するのを嫌います。ところが結婚するとあたらしい親戚や、妻の両親など更に近所付き合いにも気を遣はざるを得ません。また、給料も家庭を預かる妻に渡さねばならず、自分は全く自由を奪われ妻に拘束されている思い、そこで夫は縛ると感じない女性に逃げるわけですが、その種の女性と結婚する男性は少なく、拘束を感じる女性が妻として適しているわけです。実はこの拘束者は妻ではなく、集金に来るガス屋であり電気会社なのです。つまり、妻は『負債者どもの代表者』であり『世間の代表者』なのです。

◆ 私

恋愛は、結婚すれば終わりというものではありませんが、求愛期の女性崇拝の延長線上にあるものではありません。従って結婚生活に『永遠の愛』などと言う文化装置や道徳観念を持ち込むと結婚生活を壊し兼ねません。結婚生活では、妻は家計を、夫はその原資をうるといった役割分担が自然に生じます。

そのような立場から、妻は負債の代表者に過ぎないのに自由を奪う拘束者と錯覚するなど、互いのエゴの調整に失敗すると結婚生活は壊れてしまいます。

我が国の離婚件数は、1960年に68,000件であり、60年前半はあまり変化がなかったのですが、後半から増加し、1983年に179,000件のピークを記し一時減少したものの1990年以降は再度急上昇し、2002年には290,000件となっています。ところが、2003年には久しぶりに減少に転じ284,000件となり、2006年には257,000件となっています。

国連の人口統計によると離婚は結婚後早い時期から始まり、四年目がピークになりその後減少します。つまり、『恋の賞味期限は四年』だということです。

『子育てをする哺乳類でペアを組む哺乳類』は3%に過ぎません。つがいを形成するのは子育てに多大の負担があるためです。例えば狐の場合、メスは子供を一度に数匹生むためその養育のために巣にこもり、オスが餌を持ってきて一緒に子育てをします。しかし、このペアを組むのも子供が幼年期を過ぎるまでで、しかも、翌年も同じペアを組むかというところでもありません。

はたして、人間もそうなのでしょうか？

狐のように『期間限定の一夫一妻』なののでしょうか

第五章 五十歩と百歩

◆ 伊藤先生

日仏会館員なる菅谷直子女子は『東京新聞』に次のような文を書かれた。

『ある夫人ばかりの会合で、夫婦仲がよいと評判の女流作家が『どこの奥様も旦那様と別れたがっているのよ、私の周りで満足している奥さんは一人もないし』と、確信に満ちた口調で言うと、居合わせた夫人たちが『私の仲間も』『私のグループも』と同調したと言いながら、別れる人が少ないのは経済問題や子供の問題があるからだとして女性の未練と考える男性のうのぼれは、正直に言えばどんな男性も五十歩百歩だという妻のあきらめが夫の欺瞞を認めさせているのが多いようです。

このように離婚願望の女性が多いならば、なぜ結婚するのでしょうか？

私はここで次のように言いたい。

- ① 結婚とは男が全責任を負って女を幸福にするために設けられた約束ではない。
- ② 女性も自分で生活できる職業や技能や学問を身に着けるべきです。

つまり、女性はこの男性がきっと私を幸せにしてくれるはずだと考えて結婚するからではないでしょうか？

男性から見ても、美しいと思い結婚した奥さんもいつまでも美しくあることは出来
ないでしょう。また、そのような男性は他の美しい女性にも敏感なのです。つまり、男性側から見ても女性も『五十歩百歩』なのです。

『五十歩百歩』は中国の『大差ない』ことを現す格言ですが、プロレタリア文学者の
中野重治が『五十歩は百歩とは違う』と言うエッセイを書きました。

喧嘩や仲たがいは些細なことから起こります。それは『五十歩』が『五十一歩』ほどの違いなのです。

◆ 私

ここに男女の平均初婚年齢のデータがあります。

| 年 | 男 | 女 |
|-------|-------|-------|
| 1950年 | 25.9歳 | 23.0歳 |
| 1980年 | 27.8 | 25.2 |
| 2000年 | 28.8 | 27.0 |
| 2008年 | 30.2 | 28.5 |

男女いずれも婚期が遅くなっているのですが、男性の変化より女性の変化が著しいことです。この事実が
少子化の原因の一部をなすわけですが、高学歴になり社会進出を果たし、企業においても男性と肩を並べ
るようになり独立性を確保したことで、必ずしも男性と同居する必要はなく、ましてや子育てなどを負担と考
える女性もいることでしょう。

また、男性側からしても自炊しなくても外食産業やコンビニなどで容易に食事することができ、家事につ
いても洗濯機や冷蔵庫、掃除機と言った便利なものがあり女性に頼る必要が少なくなり独身生活を維持し易
くなっていることです。

この事実は、すでに女性が結婚において男性に夢を託し自分の人生を男性だけに頼ろうとしていないこと
を示しています。

また、結婚の出会いを調べると次のようです。

- ① 職場: 男 23.0% 女 28.6%
- ② 学校 男 22.1% 女 21.0%
- ③ 友人兄妹を通じて 男 21.4% 女 20.2%
- ④ 結婚相談所、見合い 男 1.2% 女 1.3%

このデータは、ほぼすべての結婚が恋愛結婚であることを示しています。

つまり、相手をしっかりと見ているということです。男性も女性もオスとメスと言った大雑把な捉え方をすれ
ば『五十歩百歩』でしょう。しかし、各々性格も感受性も異なるのです。それは『五十歩』と『五十一歩』の『一

歩』の違いで『百歩』ではないでしょう。その『一步』の差を見つけれられるかどうかで将来が決まります。

国連の統計によると『恋の賞味期限』は四年だということです。離婚は早期に発生するケースが多く四年目がピークだそうです。

誤りがある場合早期に対処するのがベストです。また離婚を申し出るのは女性が多くなってきているのも事実ですし、最近言われている『熟年離婚』はすべて女性側からのアクションです。

女性は、今や結婚を妄想することなく、『一步』の違いを見分ける賢さを持つにいたっています」

第六章 愛とは何か

◆ 伊藤先生

人と人は何で結びつくのでしょうか？親の愛、友情、同志愛、男女の愛でしょうか？

イエスは『他人にしてほしいことを他人にしてやれと』と言い、孔子は『他人にされたくないことを他人にするな』と説いています。

でも、ほんとに人と人を結びつける絆はないのです。

皆、あからさまにはい言わないのですが性、セックスがあります。現実的にはこれが男女を結びつける最大の絆なのですが、性はそれ自体不安定なもので誰とでも結び付けられるものです。

そこで人間は、真心と性の絆を一緒にした恋愛なるものを考え出しました。人間は美しい魅力的な相手を見つけた場合、独占したいと思うわけで、そのような執心に取りつかれた時、「私は彼女(彼)を愛している」と思い、「俺のしたいことを相手に受け入れさよう」と考えるわけです。

このような強烈なエゴはイエスのように『他人のエゴを認めよう』とする考えとは全く違うものですが、両者の思惑が一致したときは『イエスの愛』以上の形になるでしょう。

愛し合った男女は、その愛が努力的であるよりも、もっと自然な欲望充足型ですから意志の働きはほとんど必要ないのです。

このような恋が、奉仕や従耐というエゴに反したものなしに人間相互を結びつけるほんとの絆なのだを確信した男がいます。それは D・H・ローレス君で自分の考えはイエスの考えよりもっとリアルで実践的だと断言しました。

しかし、人間はほんとに愛しうるものなののでしょうか？イエスの思想は『他人のエゴを認めてできるだけ満足させよう』としています。これはヨーロッパ系統の考えで、東洋は『自分のエゴを消す努力し調和を見出す』としているわけです。つまり、エゴを悪者と考えているのです。

そこで問題は、日本の男性(女性)は日本の女性(男性)を愛し得るかと言うことです。

気を付けてください！『男女の愛は人生を幸福にする鍵だ』と説いた、北村透谷は自殺したのです。

◆ 私

近年 MRI などの医療機器の発達で、恋愛を科学的に扱う糸口となっています。

ニューヨーク大のフィシャー教授は、MRI を活用し恋愛のメカニズムを解明する研究を行っています。彼は熱烈に恋愛中のカップルを MRI 中に入れ脳で何が起きているかを調べ、腹側被蓋野で作られ快楽をもたらすと発生する神経伝達物質ドーパミンが、尾状核の先端部に達する活動を認めています。

腹側被蓋野は、脳の中心に位置する脳幹にあり、呼吸、心臓活動、体温調整など基本的な生命現象を担

っています。一方、尾状核は、脳幹のすぐ外側に位置する大脳基底核と呼ばれる動作や運動に関する場所で、脳幹と大脳基底核はいずれも、すべての脊椎動物が共通して持つきわめて原始的な脳で、『爬虫類の脳』と呼ばれているものです。

さてこの『恋の中核』の腹側被蓋野と尾状核は、原始的な衝動の一つ『報酬系』と呼ばれる神経ネットワークに属し、空腹時にお腹が満たされた時の感じる満足感をもたらすもので、生物が生きるために必要な機能として哺乳類が誕生するはるか昔から進化した原始的極めて重要な機能なのです。

その結果、フィッシャー博士は「恋は、考えるとか、感じるとか言ったこととは全く次元が違うもので、理性でコントロールできるものではありません。もっと原始的な、抑えきれない衝動によるものなのです」と話しています。

伊藤先生の恋に対する警告は現在ではこのように科学的に実証されています。

とすると、愛とは人と人を結びつける絆なのでしょうか？

第七章 正義と愛情

◆ 伊藤先生

もし世の中が、正しいことばかり言って生きられれば、幸福な状態に違いありません。

例えば、化粧気のない顔で「わたしの鼻はこんなに低い」とか「わたしの足はこんなに太い」とか言って、真実の姿を見せることで、そうしない場合より幸福になるとは言えません。このように、真実とか正義のみで行動するのは、危険です。

デリケートな『男女の愛』においてこのようなことが起こった場合について、不本意ながらいくつかの『愛の術策』を提案させていただきます。

『愛の術策』は、『外形的術策』と『心理的術策』の二つから成り立ち、『外形的術策』は『化粧学』と『衣装学』から成り立っています。この分野はすでに皆さん相当の学識をお持ちですので私は控え『心理的術策』の話を申し上げます。

一般的に自分の夫または恋人が他の女性に接近したとき、相手のところに押しかけたりするのは下策です。そのような場合、まず第一に取るべき態度は、美しく装い、理論的話し合いで男性を牽制することです。これでも男性が離れていくときは、第二の手段として夫の見えるところで他の男性に好意ありげな態度をとることです。この場合奥さんが芸術的スキルを有しもてはやされるとさらに効果的です。ここで重要なことはその行為が完成していると思わせてはなりません。

万一、以上の二策も効果がない場合は、言行一致の美德を捨てて、「夜遅くなれば締め出すわよ」とか「家に帰らせてもらいます」などと言って一二度は我慢し締め出さないで、同時にニコヤカにし、美しく化粧し、なるべく甘ったれて男性を骨抜きにすることです。

つまり、『ウソイツワリ』と『コケットリイ』によって愛と真心を包むのです。

そのような隷属的な虚偽の生活は嫌と言われる方はどうぞ別な決断力ある道をお取りください。

◆ 私

真実をのみを述べることで生きられれば、幸せなことは事実です。

例えば、浮気がばれた時の対応で、アメリカ人は正直に真実を語るのが解決の唯一の道だと信じられていますが、フランス人は尤もらしい嘘をつくそうです。相手も嘘だとわかっていながらも理屈が通っていれば、決して告白など求めずに自然に元の鞘に収まるのを待ちます。洗いざらい告白などされたのでは、聞かされた

方はたまったものではありません。大人の世界です。

我が国の離婚件数は、1960年の68,000件から2006年には257,000件と増えていますが、この離婚の原因として挙げられるのは、『性格の不一致』が男で63.2%、女で46.2%、『異性関係＝浮気』は、男19.3%、女27.5%、『DV』は、男5.3%、女30.8%です。

ここで最も多い『性格の不一致』を詳細に調べると60%が『浮気』だとある女性のカウンセラーは語り、浮気のサインを早期に見つけることが大切だとして六つのサインについて語っています。これは男女ともに有効です。

- * 携帯の扱い方が変わる:着信音を消したり、トイレやバスルームなどで返信している。
- * 会話が減った:あなたの話をうわの空で聞いたり、会話が少なくなる。
- * お金の使い方が変わる:派手に使うばかりでなく、使わなくなることも要注意。
- * 身だしなみに気を遣う:浮気の初期にもっとも現れやすい現象です。
- * 仕事のペースが変わる:『残業』『接待』『出張』などが急に増える。
- * セックスのペースが変わる:セックスが義務的になる。

以上のような兆候に注意しながら、先生の提案の『愛の術策』を試みることで、二人の絆を常に確認するのが大切です。なぜなら、恋の賞味期間は四年ですから……。

第八章 苦悩について

◆ 伊藤先生

あなたは後悔することはありませんか？ 今日あったこと、昨日のこと、三年前のこと、十年前のことを思い出し、『あの時告白しておけば』などと、心がかきむしられるような気持ちになったことはないでしょうか？

私の経験によると後悔は、時がたつにつれ幾何級数的に増加するものです。実現しなかった恋愛に後悔し、また嫉妬する人ほどノーマルな人間だと思います。

すなわち、『よい楽器ほど鳴りやすい』ということで、人間性豊かな人ほど喜んだり、悲しんだりするものです。

宮本武蔵は『我後悔せず』と宣言していますが、相当に敏感な人だったのでしょう。その敏感さをもって自分の過去の行為について自己判断すれば、それは後悔になるでしょう。その後悔で起こる嫉妬などの感情で、自分や他人を傷つけるような無駄使いをせずに剣の道に集中し名人になったわけです。

もっとも、このような敏感さをどのように使うかは各人に任せられています。

しかし、女性は多少ヤキモチを焼き、美しい柳眉を逆立てるのも魅力の一つで、あまり悟りきってしまったら世の中も家庭も変化に乏しくつまらなくなります。

感情がある程度浪費的に表現されるのは、世の中を美しく、楽しく、豊かにしますが、程度を超えてはいけません。その豊かさが程度を超えると本人が悩みます。

ドストエフスキイは子供を亡くした夫人が悲しむのを見て、僧のゾシマに「苦しむがいい。そうすると少し楽になる」と言わせています。

◆ 私

二〇〇四年の流行語ベスト10に『負け犬』(酒井順子)という言葉があります。

彼女の定義によると未婚、子なし、三〇代以上の女性を指しています。

『勝ち犬』とは『負け犬』に入らないすべての女性を指すのですが、(男性を指す場合だけ『オスの……』とします)いわゆる普通に結婚して子供を産んでいる女性たちです。この中にはエリートと結婚しセレブに属する者もおれば、子供がぐれて家庭騒動のもとになっている家庭もあります。

概して『負け犬』は高学歴・高収入の女性が多いのですが、このような女性が『負け』と判断されるのは、収入という物質的なものより、生命のある子供——有機的——を産でない事実にあります。

しかも、この『負け犬』がいることがあたかも『少子化』の元凶のごとくされていることです。負け犬になった理由は各々異なりますが、多くの『負け犬』は結婚しなかった理由を『結婚に否定的であったわけではなく、単に適当な相手に出会わなくて、ふと気が付いたら三〇年を超えていた』と述べ、特に後悔している様子はなく世間的には『負けた』といって過ごす方が、気が楽だと酒井順子は語っています。

もっとも『負け犬』の結婚対象は『オスの負け犬』ですが、この男性群は総じて低学歴、低収入なので結婚の対象にはなりません。近頃では離婚も増えバツイチの『オスの負け犬』も発生しています。この方がぐっと『負け犬』の結婚対象としては優れていると思います。

人生は『ボートを漕いでいるようなものです』。つまり、現在と過去は見えますが自分の行く先——背の方向——、未来は見えません。そのため、後悔することが多いのですが、酒井順子さんのように楽天的に過ごす方が賢明だと思います。

第九章 情緒について

◆ 伊藤先生

ある人が論理に従い社会の善なるものを思考し、その効果を論理的に算定して火炎瓶を投げた時の心理的実感は、代官を切り敗れると知りながら赤城山に立てこもる博徒の衝動に似た情感が論理の仮面を被って表れたにすぎません。

民主主義社会においては、正しい調和ある秩序は論理によって作られるものですが、実は論理が仮面に利用されている場合が多いのです。理屈や法律を作ることは容易ですが、情緒を新しく作ることは極めて困難です。

問題を限定し愛の問題を考えてみましょう。

『あのまなざしが、とてもすてきだ』とか『あの人のことを考えると、胸がドキドキする』といった恋愛感情は、情緒以外の何物でもありません。恋愛の歌は、このような情緒を旋律的に配置することにより創られます。恋愛が人を支配するということは、情緒が人を支配するのにほぼ間違いありません。恋愛は特定の人を自己にのみ確保し、自分にのみ愛着させようとする強烈なエゴです。この特定な人に抱く喜ばしい欲求を情緒として味わうのです。

このエゴを悪というつもりはありません。ヨーロッパの近代社会はこのエゴを是認することから成り立っています。エゴは社会の秩序や家庭の秩序に対立し、それを認めまいとして自己主張します。秩序はエゴにゆずられますがそれでいいのです。戦前はエゴを捨てて国家に奉仕することが求められたのです。

エゴは殺すべきものでなく、他人のエゴと調和させ生かすべきものです。それが社会生活です。互いに自己主張すること自体が相手を満足させることができるのは性の働を根本とする恋愛においては可能です。

古来日本人の感覚は、清い生活は出家遁世、花鳥風月に遊ぶことや、この世ではほんとの恋愛を貫くことができないからあの世で遂げよう、といった死や遁世思想に結びつきます。

このような日本的情緒に根差した恋愛は危険です。恋愛や夫婦生活の中で理屈を言う女性は嫌われます。男性は大学で論理を身に着けますが、その男性が女性を選ぶときは、あまり教養のある女性は敬遠するとある新聞に報道されていました。

自分のエゴと妻のエゴを調和させる自信のない男は実にだらしないと思いますが、このような男性を相手にするとき教養を身に着けた女性の生き方は難しいといわねばなりません。しかし、すこしずつでも互いに話し合い論理による調和を求める努力が必要だと思います。

◆ 私

我が国の離婚件数は、前に述べたように 1960 年に 68,000 件でしたが、以後増加の一途をたどり、2006 年には 257,000 件となっています。

このような離婚件数の増加の一因は、夫婦のエゴの調整に失敗した結果だと考えられます。つまり、男女のコミュニケーションに問題があります。

男女の差は『生まれか育ちか』と、永い間議論されてきたのですが、1970 年代までは、男は外で働き、女は育児という役割分担を固守するため、『社会や文化が創りあげてきた』との考えが主流で、本質的に男女の差はないと考えられていました。

近年MRIなどの科学技術の発達により、脳が男女で異なることが明確になり、本質的に男女に差があることが解明されつつあります。

では、本質的な違いはどこにあるのか？

例えば、大脳基底核は動作や運動を司る部分ですが、——脳は、このようないくつもの核のつながりで各々役割を分担しています——この核の神経数が男女で明らかに違うのです。

そのような違いがどのような差となって表れるかを、おおざっぱに表現すると、男はあるシステムがどのように機能するかとか、物事が変化するときどのような規則によるかなどを解き明かす『システム化能力』——論理的——を持っています。

一方、女は相手の対場に立ち、相手の思いや感情を想像し、相手の気持ちに感情移入する『共感能力』——情緒的——に優れています。

互いのエゴを調和させる話し合いを円滑にするためには、以上のような男女の理解の仕方に差があるのを知っていないと、男女の話し合いは『すれちがい』に終わります。

男女のコミュニケーションを研究しているゴットマン博士——ワシントン大——は、

「性差がすれ違いをもたらす一つの顕著な例が、男女で会話に求めるものが違う」という。

男にとって会話の目的は問題解決にある場合が多いが、一方女は会話を通じて相手の感情を知ったり、自分の感情を伝えることに主眼があることが多い。つまり、女は『自分の気持ちを聞いてもらいたかっただけ』で、夫のアドバイスなど不要なのです。女の気持ちが読み取れないのは、男が女の表情を読み取るのが不得意なためです。

このような男女の感受性に差があることを理解せず、自分のエゴを通しやすくするため理屈を言う高学歴の女性を嫌うのは同じ男性としては情けないことだと思います。

第十章 生命の意識

◆ 伊藤先生

人が一般的に恋愛については成功したものより、悲劇的な恋愛を好む傾向があるのは、なぜでしょうか？

「人は苦勞を愛するものだ」という人もいますが、苦勞なしに得たものは存在しないと様だということです。砂漠で水を求めるとき初めてその価値がわかるのです。奪われたもの、手に入らないもの、滅びゆくもののみが痛切にその実在を私たちに感じられるのです。愛の滅亡物語こそ愛の実在を分かせてくれるのです。

芸術作品の中味として悲哀、別離、失恋などが描かれるのはそれらの否定的な働きにより存在を味わうことができるからです。

そこで芸術的理解の方法を、実生活の上で実現しようとする、二つの方法が考えられます。

例えば、『死んだと思えば貧しくても生きていることが幸せだ』と考えることです。

しかし、これは自分自身を安定させるものの、ますます引っ込み思案になり生きていく積極性を失います。

それに反し、病気で子供を亡くした親の場合、同じような病気で失った他の親たちと連携し、その病気を研究する学者たちを支援するグループを作り社会に貢献することで満足感を得ることです。

初めの方法は仏教的な『無の意識』であり、日本人には受け入れやすいでしょうが、後の考え方は、キリスト教的な社会的連帯意識を基盤とするもので、我々日本人にはなかなか受け入れがたいものです。

しかし、もっと根源的なものは多くの欲望を持ち、可能な限り実現することです。多くの政治家や宗教家は、個人の欲望を制限し家庭や社会の秩序を維持しようとしますが、秩序は個々の欲望を調和させる方法にすぎません。秩序が大切なわけではなく、できるだけ人間の欲望を生かすことが大切です。その秩序にぶつかり抵抗しながらどこまで自分が生かせるかをわからせ、生きていく実感を与えるのが芸術です。

◆ 私

『生きていく実感を与えることこそ芸術の役目』とする先生の強い意志が、『チャタレー夫人の恋人』を訳させたわけでしょうが、この事実は広く文壇に支持されていたことが『チャタレー事件』の裁判記録に見ることができます。

福原麟太郎(東京文理科大学教授 現筑波大。英文学者)

猥褻と検事が指摘する箇所を読んでみても美しいと感じるところが多く、湿っぽいところがなく、明るい感情を誘うものとなっており、手際のいい彫刻を見るように感じられる。猥褻とは美しくないことで、ロレンスについてはただ美しいと感じられた。

ロレンスにとっては、性欲は太陽のように明らかに輝き、人間はその中で幸福な生活をするので、恥ずかしいとか、決まりが悪いということはないのです。

神近市子(衆議院議員 フェミニスト)

女性の社会的地位の向上を考える上で、女性があまりにも性に無知でありすぎることです。その一例として、『カストリ雑誌』でさえ女性にとって初めて世界を覗かせる役目をしています。その結果今までの人生がいかに無味乾燥であったかを告白する女性が多いのです。女性の性欲過小症がヒステリーを起こし、夫婦喧嘩の元になっているケースが多いのです。読み方さえ指導すればこれほどよい性教育の本はないと思います。

吉田健一（作家。ロレンスの『息子と恋人』を訳している）

肉体において最も具体的なものは当然性本能です。ロレンスは性本能そのものまで掘り下げ、その実感に従ってもう一度精神の健全を再建する、その考え方を最も完全に展開したのが『チャタレー夫人の恋人』です。その意味において性交場面がなくてはこの作品の価値はありません。性本能は肉体の本質でそれを描くのは重要でこの小説が画期的だと言えるのです。

伊藤整の最終陳実

新しい文学、思想は古い文学思想を批判していくもので、その結果よりよい社会が出来るのです。体制的な文学、思想に合わないと言って罰するのは文学、思想の本質的な働きを知らない人たちです。新しいものを押しやるだけでは社会は進歩しません。

私が読んだのは高校生の時、友人が父親の本棚から失敬してきた『チャタレー夫人の恋人（初版）』を皆で回し読みをしたのですが、エロイ箇所を見つけるのに苦労したのを覚えています、どのような表現であったかは全く覚えがありません。そこで、最近伊藤礼（伊藤整の次男）の補訳による『チャタレー夫人の恋人』完訳版を読んでみたのですが、どこがエロチックなのか全く分かりませんでした。確かに女性の陰部を指す言葉がありますが、性交場面の描写はなく、セックスを連想させる『抱く』とか『寝る』などの言葉があるだけで、二人のラブシーンは実に美しい言葉でつづられています。この本が、小山書店から出版されたのは一九五〇年の春ですが、九月にはすでに猥褻の箇所が一箇所との指摘で発禁になり、二審では無罪になったものの最高裁（裁判官は田中耕太郎）では有罪とされています。この事実から五〇年代の性の規範を伺うことができます。

第十一章 家庭とは何か

◆ 伊藤先生

結婚は必ずしも人間生活の理想形態とは考えられませんが、人間にある生物的弱みを包み補う仮の便宜的形態に過ぎません。しかし、人間はいろいろな弱点を持っていますから、一般的に結婚生活が必要でその中で暮らさないと不安になります。

結婚生活が人間性に安定を与えるのは、

第一は、愛する人の心と身体を確保していることです。

第二は性的な満足を得るときに得られることです。

第三は、男性は料理や洗濯から解放され、女性は経済的な不安がなくなり各々が安定感をもてます。

第四は、子供が両親に見守られて育てられることです。

ここで私は、結婚生活にあまり多くの文化的、道徳的、社会的意味づけをして、人間生活の理想的最終形態であると考えることには、私は反対です。

結婚生活は生物的な自然現象で、文化的、道徳的な生活様式としては無理があるのです。

つまり、生物のオスとメスが引き合い生殖の目的を達するように、男女が恋愛という神聖化された言葉で結ばれ、種族保存の本能に惹かれて生殖し子育てに励むわけです。

この生活様式から離れると生物としての人間は不安になります。それを保護し維持するために、『永遠の愛、夫婦間の道徳、姦通の不道徳、親の愛』など戒律や道徳を作り出しているのです。そのような神聖化を拭

てみると、残るのはオスとメスの引き合い生殖・育児といった本能です。生物的本能に安定感を与えるためには結婚生活が必要なのです。

このように結婚生活は重要なものですが、過度に規範や道徳で美化し結婚を最終的な幸福を得る場と考える現代の風潮——‘50年代前半——は疑問です。

結婚生活で重要なことは、配偶者に生物としての不安を与えないようにすることです。夫が浮気をした場合、ヤキモチを焼いたりぶつたりすればいいことで、『永遠の愛の契約違反だ』などと、深刻ぶることはないのです。このような素朴な対応ができないのは、元来動物が持っていなかった体面や名誉があるからです。ですから体面や名誉にこだわる女(男)は結婚生活を維持することは難しいでしょうし、また、男性で『決してよその女に心を動かされたことはない』といった、嘘を言うことは嫌だという神経質な男性は結婚しないことです。

嘘をつけない正直者、道徳的な人は良い家庭人だと考えられがちですが、そのような論理的、道徳的なことと、生物的人間性を尊重することとは一致しません。男と女が調和して生きるために嘘やオテイサイが必要なら使うべきです。

正義や秩序は社会情勢で変化します。その時の社会の秩序にとって便利なものが正義です。本能はしばしば正義と対立し、恋愛は道徳と対立します。生物として調和ある結婚という生活様式に、論理、情緒、道徳などという動物になくて人間のみが存在する文化的な思考をあまり持ち込むとこわれてしまいます。家庭は、文化的価値判断の緩む場で、男と女、親と子という生物的調和の場です。そのためには二重の意識を持つ必要があります。

二重にものが考えられる女性は、妻・母という立場に身を置きながら社会に出て、学問、芸術などという文化的価値を身に着け社会人として生きることができます。

◆ 私

一夫一妻制は女性を平等に分配するシステムです。しかし、原始の人間社会は『ハーレム型(一夫多妻)』だったと考えられる証拠があります。

その証拠の一つは、男女の身体サイズの違いです。

一般にオスが複数のメスを支配する『ハーレム型』の社会では、オス同士が争うためオスのサイズが大きくなります。ハーレム型のゴリラ社会ではオスはメスの二倍ほどあります。

一方、テナガサルは、哺乳類には珍しく『一夫一妻制』の社会を形成していますが、オスとメスの差はほとんどありません。古代の人類の男女差はかなり大きかったことが分かっていますが、現代の男女差は、身長で一〇センチ、体重で三～四割程度の差があります。

また、もう一つの証拠は、精巣の重さを比べた場合、ゴリラは 35gr、チンパンジーは 120gr、人間は 50gr で、体重あたりで比較するとゴリラは 0.02%、チンパンジーは 0.3%、人間は 0.08%で『一夫一妻』と『ハーレム型(一夫多妻)』の中間の位置を占めています。

このような事実は、『ハーレム型』とは、言わないまでも生物学的に見た場合、完全な一夫一妻型とは言い難いのです。

『一夫一妻制』になってきた理由の一つに、人間の赤ん坊は成熟するのに他の哺乳類に比較して永くかかることがあげられています。そのため『つがい』を維持する家庭が必要なわけですが、子育てが終わった男女を結びつける絆はありません。

人間には『恋愛、性欲、愛着』というシステム以外に進化の過程で生物学的には備わったものはないのです。

第十二章 この世は生きるに値するか

◆ 伊藤先生

自殺者の多くは、生きることは美しい、家族を愛している、しかしそのような価値あるものを捨てねばならぬと考えている人が多いのですが、家族に恥をかかせた、仕事に失敗して面目ないなどの場合が多いのです。しかし、それは世間のしきたりといった秩序に元づく体面とか恥に由来するものです。

私たちは、秩序に従って生きてゆくことで、人との摩擦を減らし安全を得ていますが秩序とは、元来人々が調和的に生き幸福をもたらすように永年かかって作り上げた約束事に過ぎません。

それに秩序は時代によって変化します。戦争中捕虜になるのは恥だとされ、この秩序に従い自殺した方々はなんと憐れいことでしょうか。

愛もまたこの秩序に縛られています。恋人、夫婦、親子の愛などたぶん本能に属する愛は、これなしに生きるのは困難です。

ところが、ほんとに正しいことをしようとして秩序に反するとき、恋人や家族に迷惑をかけるのではないかと怖れしない場合があります。この種の愛は相手に対するより、自分の心に満足を得るためのものでエゴイズムの変形に過ぎません。

このような場合、ほんとにやりたい仕事を持っておれば、エゴに変形した自分を見つめ直し自分を自由にすることができます。

親が子供に託する夢、夫婦間の愛にはしばしばこのようなエゴイズムを見ることができます。そのようなエゴが生きがいを失わせたりします。

愛から自由になる、愛を制御する意思を持つことが必要です。

◆ 私

今から数百万年前の原始の時代、男は狩りに、女は家にいて木の実の採取や子育てを分担していたと考えられています。食べ物も豊富にあったわけではなく、天敵も多く常に飢えと死に直面しながら、必死に時代に適合し進化を続けてきたのです。この『飢饉の時代』への対応が現代にも引き継がれて、男は仕事、女は子育ての役割分担として残っているわけですが、これが現代では逆にマイナス要因に思えます。

人生の目的は『子孫を残す』だけでなく、『生き甲斐』や『自己実現』へと変化しているわけですが、この風潮に女性はうまく乗っていますが、男性は相変わらず原始のままであるように思います。

女子の高学歴化が進み社会的にも男性と並んで仕事をする現代において、男性は感情に対してもっとオープンになるべきです。その上で妻や家族と一緒に『生き甲斐』や『自己実現』を、ともに探るべきだと思います。

『この世が生きるに値するか』どうかは、私にはわかりませんが、『生きること』を選択します。私は、『人生を悪い冗談』に終わらせるつもりはありません。

◆ おわりに

ロンドン動物園園長デズモンド・モリス——1970年当時——は、

「現在地球上に197種類のサルがいるが、中に一種類だけ毛のない裸のサルがいる」と述べ、「人間も哺乳類の一変種に過ぎず、生物学的規範から免れることは出来ない」と語っていますが、これは『生物の種の繁殖本能』、つまり『生殖本能』、『性』から自由になれないと述べているのです。

一方、人間は『プラトニック・ラブ』——恋愛——なる概念を創りました。つまり、男女関係において、肉体的

美を愛するものの、次には、浄化され魂の愛に代わりその愛こそ純粹の愛であるとしたのです。

『電気冷蔵庫 電気洗濯機 電気掃除機』が三種の神器と言われ、ダイニングキッチンが住まいの理想とされ、道徳的には『結婚するまで女は処女、男は童貞であること』とされていた五十年代に、先生は、愛などと言うものをあまり問い詰めてもラッキョの皮をむくようなもので何も出てこない。理性による判断よりも、本能に従順であることがほんとの生き方ではないか。愛はもともとエゴの変形したものに過ぎないが、人間は意志や思考力を持っているので、本能をある程度制御することは出来るでしょうが、本能を作り変えることは出来ないのです。本能、自然性にもっと敬意を払うべきだと述べておられます。

この女性論の中心課題は、愛と性の問題ですが、夫婦以外のセックスは『不純異性行為』などと性を淫靡なものとする世論の風潮の中で、「互いに相手に、生物的不安を与えないようにする」と、セックスを肯定的にとらえ、本能に従順に生き、理性と本能をうまく調和させることを説いた先生の『女性に関する十二章』は、二十世紀末への黙示録でした。

今や女性の高学歴化は進み、ビジネス界、文学の世界でも女性の活躍は目を見張らせます。文学界においては、むしろ女性作家が支えているとさえ云えます。

上野千鶴子さん——東大教授・社会評論家・フェミニスト——はこう語っています。

『プラトニック・ラブかぶれ』の嚆矢は北村透谷ですが、恋愛を精神的に特化させ『魂の愛』と言った概念を現実的な結婚生活に持ち込めば、幻滅を感じるのには目に見えています。この恋愛の特権化が近代の疫病ですが、これは男性側の論理にすぎません。その論理が彼を自殺に追いやったのですが、これが男性側の被害にとどまっているのならともかく、女性の側へ被害が及ぶことは許しがたいことです。一例をあげれば高村光太郎の妻智恵子は光太郎に『美神』と崇められ、『マリアージュ・ブラン 処女妻』に追い込まれ、男の観念の犠牲になったのです。しかも、この時代の男性は、『肉の女』と『魂の女』とを使い分ける抜け道を持っていたのですから許すことは出来ません。

富岡多恵子さんは『菊狗』の中で、『性交は動物になって生きる希望。どんな情緒にも汚されない純粹欲望。あんたを愛しているなんかいわないわ。やりたいだけよ。お願いだから惚れたなどうっとおしいこと、云わないでね』と、『愛』と『性』は別のものだと言っています。

伊藤先生、最後は大庭みな子さんの言葉で終わりたいと思います。

『性的な関係は、人間をもっとも原始的な状況に引き戻すことができる一番単純な、ある意味では人間のさまざまな営みの軌道を修正するきっかけになる』(霧の旅)と述べ、

「男と女のことは、『不可解な人生で無限の可能性を持つ唯一の希望』である」(浦島草)と語っています。

(参考文献)

- * 女と男 :最新科学が解き明かす「性」の謎 NHKスペシャル取材班 2011年
- * オスの戦略メスの戦略 長谷川真理子 1999年
- * 発情装置——エロスのシナリオ—— 上野千鶴子 1998年
- * 負け犬の遠吠え 酒井順子 2003年
- * チャタレー裁判 倉持三郎 2007年

このたわごとのコメントは、[「こちら」](#)のページにお書きください。